耕耘機がはいると、その普及は激しく、馬は農家より殆ど姿を消し、家屋の間取りの中にも、大きな分野を占めた馬小屋も、その処置にも困る有様である。

あらくれかき、あげしろかきなども、専ら馬によったが、これも戦後の耕耘機に変っている。

5、こやしふり　肥料の主なものは堆肥で、昔はかっちきかりなどといって、若草なども刈って田圃にまいた。人糞尿をまくのを、こやしふり、やしないかけなどいうが、若松近郊で、野菜栽培のためにも、多くのこやしをあげてきて腐熟させておき、ふり桶にかついで、こえびしゃくでふりまいた。やしないは作物を養う肥料の意味である。大正の中頃から化学肥料がぽつぽつはいり、まめたま、あぶら粕などといった肥料まで、逐次追出して辛うじて、堆肥のみ、屋敷の隅のこえ積場に屋根をかけたり、下をコンクリート張りにしたりして、改良を加えて維持している。野良の枠積みのようなものも普及してきた。

6、田植え　直蒔きも日本の各地で試みられているが、この地方では、総べてが、これだけは手先で植付けている。ただ植える寸法をはかる方法だけは変化している。やたら植えという、寸法を適当にして、乱植えをしたのが、定規をあてるようになって、定板ができた。つぎは寸法を定めたすじ立て定規を使うようになっている。

田植えは雪の上で予祝祈願をするほど、農業の基本で、これにからんだ信仰的行事もたくさん引継がれている。田植えはまた、殆ど野良の晴れ着にも近いものをつけた、早乙女の野良の労働の晴れの場でもあったようである。用水と生育の関係もあって、短日月に植え終ろうとし、労働力が集中するから、他地方から、たくさんの早乙女を傭ってくる必要があった。

田植えの終った日には馬鍬洗いという祝いをする。さ苗、馬鍬、えんぶりなどに餅を搗いて供える。これを他